

京都大学所蔵の高山寺本 ―書物と目録―

大学院文学研究科 助教授 大 槻 信

1 はじめに

2002年秋に開催された平成14年度京都大学附属図書館公開展示会「学びの世界―中国文化と日本―」の準備にいくらか関与した。訓点本を中心に出品品を選定したのだが、まず困ったのが京都大学所蔵の訓点本もしくは仏典古鈔本のリストがないことである。吉澤義則・遠藤嘉基という京都大学の学者によって、訓点本全体の目録である『点本書目』が編まれているにもかかわらず、京都大学所蔵の訓点本の完全なリストは存在しない。京都大学点本目録の必要性を痛感した。さらに言えば、京都大学仏書目録・京都大学版本目録・京都大学善書目録のようなものが編まれることが望ましい。

目録は研究を益することが大きい。しかし、近代以前の古目録は、何も後世の学者の便宜を思って作成されたものではない。学びの蓄積、蔵書の増加に伴い、あるいは社会全体における書物の集積に伴い、それらを整理し、管理・記録する為に生まれたものである。それらの目録は、当時の学問文化状況をはじめ、様々なことを教えてくれる。とりわけ、現存しない書物について調べる際には、最大の情報源の一つであり、また、所蔵場所が変更された書物について調査する時にも、有益な手引きとなる。

そこで、現在京都大学に所蔵されている高山寺旧蔵本を中心に、書物と目録の関係について考えてみたいと思う。というのも、高山寺では中世以来その経蔵本について多種の目録が作成されており、鎌倉時代以降、現在に至るまで、各時代における典籍の概要を把握することが可能だからである。

高山寺は京都市右京区梅尾にある古刹であり、一般には紅葉と鳥獣戯画、華嚴宗祖師絵伝などによって知られている。平安時代中期に創建され、その後、神護寺の別院であったのが、

建永元年（1206）明恵房高弁（1173-1232）が後鳥羽上皇よりその寺域を賜り、華嚴・真言兼学の寺として再興した。中世以来の学問寺として知られ、収蔵する典籍が質量を兼備した一大コレクションであることから、経蔵本は「高山寺本」としてつとに名高い。その多くが現在まで同寺に伝来し、収蔵の典籍文書のすべてが重要文化財に指定されている（国宝指定を含む）。一部山外に出たものがあり、京都大学収蔵本もそれに該当する。

2 高山寺の経蔵と目録

古代日本の目録といえば、

日本国見在書目録（藤原佐世撰。ca.891成立。）

通憲入道蔵書目録（編者未詳。成立年未詳。

藤原通憲1106-1159。）

本朝書籍目録（編者未詳。鎌倉末期成立。）

などが著名であろう。しかし、これらは漢籍、あるいは国書の目録であって、内典（仏書）は含まない。仏書の目録には、一つに請来目録があり、一つに経蔵目録がある。ここで取り上げようとするのは、高山寺の経蔵目録である。

高山寺では、鎌倉時代以降たびたび経蔵の整理・調査が行われた。その整理に伴って、経蔵目録が作成され、また、典籍の表紙に経蔵名・函番号などが記入された。有名な「高山寺」朱印の押印もその様な整理作業の一つである（図1）。

奥田1985、宮澤2002によって、高山寺経蔵の歴史と目録との対応を見る。



図1 高山寺朱印
『曼荼羅次第法』より

高山寺草創期には、東西二字の経蔵があった。東経蔵には一切経一部、大般若経一部、真言書十二合等を収蔵し、西経蔵には（唐本）一切経一部、五部大乘経一部、大般若経一部、章疏等百合等を収蔵していた。

明恵没後二十年を経た建長年間にこの経蔵の調査・整理が行われた。その際に作成された目録が、

- a 『高山寺聖教目録』(建長二年(1250)、高山寺典籍文書綜合調査団1985所収。)
- b 『高山寺経蔵聖教内真言書目録』(建長三年(1251)、高山寺典籍文書綜合調査団1985所収。)

である。後者は真言関係書を、前者はそれ以外を集録している。

東西経蔵以外にも、法鼓臺道場(高山寺内の説法所)に収蔵された聖教があり、その目録が、

- c 『法鼓臺聖教目録』(鎌倉時代中期。高山寺典籍文書綜合調査団1985所収。)

である。以上が建長・文永期の第一次収蔵体系である。

それ以降、鎌倉・室町時代に、経蔵の変更や、房舎の変転があった。まず、経蔵自体が東西二字から石水院経蔵にまとめられ、法鼓臺聖教も石水院経蔵やその他の僧房に移された。

特に、室町期まで高山寺の中核をなした方便智院(定真開基)には、明恵、定真以下歴代の書冊が集積された。方便智院の収蔵目録が、

- d 『方便智院聖教目録』(1484以降。高山寺典籍文書綜合調査団2002所収。)

である。

第二次の収蔵整理は寛永年間(1628-44)に始まる。石水院経蔵を顕・密の二室に分け、顕経蔵には『高山寺聖教目録』収載分を収め、密経蔵には『高山寺経蔵聖教内真言書目録』掲載書を中心とする真言書、ならびに法鼓臺聖教、方便智院聖教が収められた。

寛永期の整理で各聖教に経蔵名と函番号が記された。〈顕経蔵〉所蔵分には「甲」「乙」を付し、〈密経蔵〉所蔵分には「真」

(真言書)「臺」(法鼓臺)「東」(東坊方便智院)を付した。

つまり、表紙に「甲」「乙」とあればa『高山寺聖教目録』に記載されている可能性が高く、「真」とあればb『高山寺経蔵聖教内真言書目録』に、「臺」とあればc『法鼓臺聖教目録』に、「東」とあればd『方便智院聖教目録』にそれぞれ掲載されていると考えてよい。それに続く数字は箱番号をあらわす。例えば、「臺十五」は法鼓臺聖教の第十五箱を指し、表紙にこの文字を持つ書物は『法鼓臺聖教目録』の第十五に記載されていると推測できる。

目録は整理の度に作成された為、上記の目録はそれぞれ新旧異なったバージョンを持つ(基本的には、鎌倉期の古目録と江戸期の新目録の二種)。また、上にあげたもの以外にも、まだ数種の目録がある。

3 京都大学所蔵高山寺旧蔵本

現在までに管見に及んだ高山寺旧蔵本として、以下の七種をあげることができる。

古写経断簡 谷村文庫 1-23コ5貴

一巻、卷子本、断簡(巻首・巻尾を欠く)平安時代中期写

四分律比丘含注戒本 谷村文庫 1-23シ6貴
三帖、折本装、巻首「高山寺」朱印、上巻巻尾「銭塘洪先刀」

成就妙法蓮華經王瑜伽觀智儀軌 谷村文庫
1-23シ7貴

一巻、尾欠、卷子本、本文三行目中央に「高山寺」朱印、院政期初期写

佛說八關齋經 谷村文庫 1-23ハ1貴
一帖、折本装、巻首「高山寺」朱印、紹興30年跋刊(南宋1160)

梵網經盧舍那仏説心地法門品菩薩戒本
谷村文庫 1-23ホ1貴

一帖、折本装、巻首(扉絵の部分と巻序の部分、二箇所)・巻尾「高山寺」朱印、北宋版か

曼陀羅次第法 谷村文庫 1-26マ1貴

一帖、粘葉装、巻首「高山寺」朱印、鎌倉時代建久四年写、外題「高尾」

薬字抄（香字抄） 京都大学附属図書館 7-02ヤ1

一卷（巻三） 卷子本、首わずかに欠、巻首紙背「真第九箱」（朱） 巻首「高山寺」朱印、外題「真第九箱／薬字抄 高山寺」、院政期十二世紀写、奥書（朱・別筆）「永萬二年九月九日丹波抄五巻之内也」

他に、近世以降のものとして、

高山寺図像鈔目錄 京都大学附属図書館 1-20コ3貴

一冊、袋綴、巻首「高山寺」朱印、江戸時代中期写

があり、また、寺内子院の一つ、善財院の旧蔵書がある。

三部經傳受聞書 京都大学文学部 国文・寿岳文庫 7 C 4

一冊、袋綴、原表紙裏「梅尾／善財院」、片仮名交り文、室町時代応仁二年（1468）写

高山寺旧蔵本は谷村文庫に多く蔵されていることがわかる。谷村文庫とは、故谷村一太郎氏の旧蔵書であり、氏が新村出博士と姻戚関係であったこともあって、氏の没後、昭和十七年に京都大学附属図書館に寄贈されたものである。古写経を中心に貴重な典籍を多く含む。

上記の内、は宋版である。『四分律比丘含注戒本』も、上巻奥付に「錢塘洪先刀」とあり、そのため『谷村文庫目録』に宋刊本というが、紙質が中国のものとは思われない。龍門文庫に同版本（上巻のみ）がある（川瀬一馬『龍門文庫善本書目』）。同書目が「泉涌寺版の中に算へらるべきものであらう」という通り、律の覆宋版であるから、泉涌寺版の可能性がある。『佛説八關齋經』は陰刻大字の南宋版である。京大所蔵本の中では『梵網經盧舎那仏説心地法門品菩薩戒本』（図2）が白眉であろう。見事な扉絵があり、宋版としても古い。北宋版

であろうか。「敬」字に欠筆が見られる。また、あまり密ではないが、角筆によって加えられた訓点（仮名、合符、句読、返点）がある。



図2 『梵網經盧舎那仏説心地法門品菩薩戒本』巻首

以上は、「高山寺」朱印の存在などによって、高山寺旧蔵が予測されるものである。裏付けを得るためには、さらに高山寺経蔵古目録との対応を調べる必要がある。というのも、その価値の高さから、高山寺本を語る偽造書が皆無ではなく、朱印の偽印も存在するからだ。

『古写経断簡』は断簡であり、高山寺印もないため、高山寺旧蔵を証明できない。裏書「此断簡是高山寺旧什賣佐々木山城／守奉納大乘經也」によって、高山寺旧蔵と考えられている。このように断簡であったり、『四分律比丘含注戒本』、『成就妙法蓮華經王瑜伽觀智儀軌』のように、特に珍しくない書物で、表紙が改められている場合には、目録との対応を指摘することが難しい。

一方、『佛説八關齋經』の場合、後補表紙であり、経蔵名・箱番号を確認できないものの、特定が可能である。というのも、高山寺旧蔵本についていえば、『佛説八關齋經』は目録に一箇所のみ記載され、現存書は一部のみなので、一対一の対応を認めることが出来るからであ

る。すなわち、『高山寺聖教目録』に

八關齋經一卷（第七十四〔乙ノ〕15）

とあって、それ以外の目録には同書名の記載がない。そして、高山寺に同書は現存せず、山外にあることも聞かない。とすれば、京都大学所蔵のこそが、おそらくこれに相当すると強く推定できる。もし、に原表紙があれば、「乙」「七十四」の文字が記されていたはずだ。

『梵網經盧舎那仏説心地法門品菩薩戒本』も、後補表紙であるが、高山寺に『梵網經盧舎那仏説心地法門品菩薩戒本』は現存せず、『高山寺聖教目録』に

梵網經戒本一卷（第二十四〔甲ノ〕1）

梵網經戒本一卷（第七十四〔乙ノ〕13）

とあるので、どちらかが該当すると思われる。

『曼陀羅次第法』については、原表紙が存在し（図3）、右上に「臺第[三十]」、題箋に「高尾」とある。「臺」とあるので、『法鼓臺聖教目録』を見ると、たしかに第三十に、

高尾一帖（第三十⁴⁷）

と見えることから、同定できる。



図3 『曼陀羅次第法』表紙

4 薬字抄（香字抄）

最後に、『薬字抄（香字抄）』について述

べる。この資料は冒頭で触れた公開展示会に出陳されたものである。展示会の図録に解題を物したが、ここでは、目録との関係につなげて、解題に書ききれなかったこと若干を補足する。

本書は外題に「薬字抄」とあるが、内容は各種の香について、その性質、効能、産地、用法などを記載した本草系の類書である。僚巻の巻一（大東急記念文庫蔵）の外題に「香字抄」とあることなどから、『香字抄』巻三と認められている。平安時代中期以降、俗家における薫物、御修法の盛行に伴い、また仏家では勤行、法会に香が使用され、護摩の料となることから、香に関する知識が必要とされた。一般的な本草書に飽きたらず、香薬の専書が求められたものである。記述は『開宝重訂本草』（李昉等撰、開宝七年（974）刊）を中心に、諸書からの引用がある。

巻首紙背及び外題に「真第九箱」と見える。同じく高山寺旧蔵の『香字抄』巻一（大東急記念文庫現蔵）には「真第十一箱」とある。寛永年間に行われたと推測される箱番号の記入には一部錯誤があったらしく、鎌倉時代写の『高山寺経蔵聖教内真言書目録』では「真第十一箱」に「香薬抄三巻」と見え、「第九箱」に記述はない。寛永十年（1633）写の『高山寺経蔵聖教内真言書目録』には「一卷欠」とあるから、その時点ですでに巻二を欠いていたようである。

本書の奥書には「永萬二年九月九日丹波抄五巻之内也」とある。丹波家は『医心方』を著した丹波康頼（912-995）以来、医薬の家として知られ、この書も「丹波抄」と呼ばれることがあったことがわかる。また、「五巻之内」とあることから、うち三巻が『香字抄』、二巻が『薬字抄』に相当すると推定される。

「丹波抄」の名は高山寺の他の古目録にも見える。『禅上房書籍欠目録』（鎌倉時代中期写、高山寺典籍文書総合調査団2002所収）第四六に次のようにある。

「信西入道」(朱)

丹波抄五巻 丹波宿祢以来之抄也今為類聚加
新注也

本云永萬二年九月以相公入道之本更補欠了

東寺沙門勝賢

香抄二—薬抄三—合為五帖

この目録は明恵晩年の弟子である禅上房(禅浄房)が所持していた書籍の内、何らかの理由で欠失したものの一覧である。したがって、「丹波抄五巻」は現存しない。上記は目録などに摘記されていた丹波抄写本の奥書を転記したものである。

禅上房が所持していた書籍は、その灌頂部分が『聖教目録〔禅浄房ノ灌頂〕』(現存、高山寺典籍文書綜合調査団2002所収)としてまとめられ、それ以外が『聖教目録〔禅浄房ノ書籍〕』(逸書)のような形で収録されていたと考えられる。後者の欠本部分に相当する目録が『禅上房書籍欠目録』であろう。

『禅上房書籍欠目録』の記述は『香字抄』の成立と伝写の経緯について、また、本書奥書に見られる「永萬二年九月九日」の意味について考えさせる。記述を信じれば、丹波宿祢康頼以来、丹波家には代々書き継がれた香薬の書があった。その集成者は名医として知られる丹波雅忠(1021-88)などが想定できる。それを信西(相公)入道藤原通憲(1106-59)が類聚し、新しい注を加えた。通憲の息である勝賢が、通憲の没後、永萬二年(1166)九月にその欠をさらに補ってできたものが丹波抄であるということになる。丹波家の家説を基礎としながらも、丹波抄の最終的な成立には通憲親子の関与が深いことになる。

たしかに、『通憲入道蔵書目録』にも、

大観本草目録 大観證類本草 薬證病源歌
一結 合薬方一帙(以上、第三八櫃)

大観本草下帙 医書要字二巻 薬種略決
要薬秘方 本草和名下(以上、第三九櫃)

のような本草書、医学書、薬学書が見えるから、

その様な所為は十分にありえたことである。

したがって、本書奥書の「永萬二年九月九日丹波抄五巻之内也」は、「この書は永萬二年九月九日に勝賢が著した丹波抄五巻の一部(香字抄部分)である」という意味であろう。従来、この奥書は読了識語と考えられてきた。すなわち、「永萬二年九月九日」は読了の日時であり、本書の書写・成立はそれよりのさかのぼると考えられていたのであるが、以上の考察に従えば、「永萬二年」は成立年であり、本書の書写は逆にそれよりも降ることになる。

目録は寡黙に見えて、意外に多弁である。

本稿は2002年12月25日に開催された第六回・日中韓版本研究会における口頭発表に基づく。研究会の席上、貴重なご意見・ご教示を賜った諸賢に深謝する。

<参考文献>

奥田 勲 1985「高山寺経蔵とその古目録について」(『高山寺経蔵古目録』)

高山寺典籍文書綜合調査団 1985 『高山寺経蔵古目録』(東京大学出版会)

高山寺典籍文書綜合調査団 2002 『続高山寺経蔵古目録』(東京大学出版会)

宮澤俊雅 2002「高山寺経蔵とその古目録について」(『続高山寺経蔵古目録』)

(おおつき まこと)